

編集後記

近年、日本では自然災害の経験が広がり、被災はもはや一部の地域や人びとに限られた特別な出来事とは言い難くなっています。災害の頻発化・激甚化のもとで、多くの人びとが何らかの形で被災を経験し、被災と隣り合わせの状況が日常の一部となりつつあります。こうした中、新たな課題として浮かび上がっているのが、「多重被災」と言えます。近年、豪雨災害や地震などによって、復旧・復興の途上にある地域が再び被災する事例が各地で見られるようになっており、そこでは、被害の累積のみならず、再建に向けて歩み出そうとする住民の意欲や希望が損なわれ、失意やあきらめが生じるなど、心理的・社会的な影響も深刻であることが報告されています。ですが、その一方で、そもそも「多重被災」とは、被災の繰り返しとは何が異なり、何を指し、何が経験され、何が課題かについては十分明らかにされていません。

そこで、本号の特集1「多重被災と復興」では、こうした問題意識のもと、各地の事例や研究・実践の知見を通して、多重被災が人びとと地域社会にもたらす影響やそうした被災における支援について多角的に検討しました。復興は、一度きりの到達点ではなく、繰り返される被災のなかで揺れ動く、長期的かつ不確実なプロセスとして捉え直される必要もあるように思われます。制度や支援の枠組み、地域社会の持続性、被災者の生活再建や将来展望など、復興をめぐる前提そのものを社会に問いかける号となれば幸いです。繰り返される災害の時代において、私たちはいかに「復興」を構想しうるのがか、被災とともに生きる社会のあり方をいかに描くことができるのか。特集1が、その課題を読者とともに考える場となることを願っています。

また、本号では、「災害復興とケアの研究会」から自主的に提案された企画「災害復興の再考——多義的なケアの視点から」を、特集2として収録しました。本特集は、日本災害復興学会の2024年度研究会として行われた活動の成果を基礎とし、6本の論考として取りまとめられたものです。特集2では、空間と時間、手記の執筆、日常の反復、復興を記述すること、社会的な活動といった多様な側面から、復興のなかに現れるケアのあり方が検討されています。ここでいうケアは、特定の支援行為に限定されるものではなく、人びとの生活や関係を支え、維持し、つくり直していく多義的な営みとして提示されています。

特集2は、学会の研究会における継続的な議論が、大会での報告と討論を経て、まとまった学術成果として学会誌に結実したのもでもあります。今後も、学会の研究会をはじめ、会員みなさまによる共同研究や研究交流から生まれた成果が、明確な問題意識と構成をもつ企画として積極的に提案されることを歓迎します。こうした企画が、個々の研究成果を公表するだけでなく、災害復興をめぐる新たな論点を学会内外に提示し、さらなる研究と実践の対話をひらく契機となることを期待しています。

本号は、二つの特集および一編の書評という大変読み応えのある内容となりました。ご寄稿を賜りました執筆者の皆様には、心よりお礼申し上げます。本号が、読者のみなさまの実践や研究に何らかの形で貢献することを願っております。

学会誌編集委員会委員名簿

委員長	荒木裕子	京都府立大学
副委員長	石原凌河	龍谷大学
副委員長	大門大朗	福知山公立大学
幹事	小川知弘	関西学院大学
委員	飯考行	専修大学
	間中光	追手門学院大学
	阪本真由美	兵庫県立大学
	高原耕平	金沢大学
	辻岳史	国立環境研究所
	山中倫太郎	防衛大学校
	渡邊圭	東北学院大学